

【第5分科会】

公民館事業を通じた異文化交流

春日部市中央公民館内牧地区公民館
社会教育主事 大澤 恵太

1 はじめに

内牧地区は春日部市の北西部に位置し、人口13,694人、世帯数6,013世帯（平成27年5月現在）の豊かな自然あふれる地区である。公民館には市職員が勤務する、いわゆる直営となっており、職員は5名体制である。内牧地区公民館と内牧南公民館の2館を管理、運営している。

公民館は、豊かな地域をつくることを最大の目的とし、様々な主催事業を実施している。参加者に楽しいひとときを提供し、満足して帰っていただくことは大切なことであるが、単に“参加して楽しかった”というだけでは、本来の意味は成さないと考える。事業に参加した市民にとって+αの付加価値を見出さなくてはならない。そこで私たちが企画したのが、単なる料理教室の枠を越えた異文化交流、そのなかで外国人への人権を考える機会を提供するということだった。平成25年度実施した当事業は、平成26年度に継続され、今後ますますの発展を期待できるものとなった。



* 内牧地区公民館

* 内牧南公民館

2 実施までの経緯

KIFA（春日部市国際交流協会）が発行する機関誌『こんぺいとう』の誌面を見たのが、今回の講師となる片桐テンジン氏との初見であった。インド料理店のオーナーであり、内牧地区に店舗を構えているという記事が目にとまった。

確かに、地区内に店舗があることは知っていたがこれまで足を運んだことはなく、どのような人が経営しているのか等、考えたことはなかった。まずは、店舗を訪ねてみることから始まった。

通常の公民館事業においては、講師折衝を重ね事業の企画から詳細までを煮詰める。だ

が、今回のように外国人を講師に招くのは稀なケースであり、私自身、コミュニケーションに不安を感じていた。しかし、実際会って話をしてみると日本語も堪能、そして何よりユーモア溢れる人柄で、初対面で打ち解けることができた。相手が外国人であるという先入観ゆえ、自ら壁を作ってしまったのだ。

この事業は、職員である私自身が、まさに“異文化交流”を体験することから始まった。参加者にとって、単なる料理教室ではなく、食を通じて外国人と交流を深めるという点に付加価値を見出してもらおうようねらいを定め、講師とともに密に準備をおこなった。

3 取り組みの概要

(1) 事業の経過

①平成25年度『“モモ”つくりとインドのお話』

講師指導のもと、モモというインド・ネパールの餃子を調理し、会食しながら講師にインドの文化や生活についてお話しいただく内容とした。

参加者が集まらなければ事業は成立しない。外国人が講師であるということに対し、どの程度の反響があるのか。かつての私のように、壁を感じて敬遠されてしまうのではとの一抹の不安もあった。だがそんな心配もよそに、幼児とその親子、中学生から高齢者まで、男女ともに実に幅広い年齢層の参加者23名が集まった。料理好きという主婦友達の方々が多かったが、それ以外にも海外旅行が趣味という方やホームステイ経験のある中学生、インドヨガの指導者など、様々な顔ぶれが参加した。満足度も非常に高かったことから、このような機会をより多くの市民へ提供しようとして次年度への継続に至った。



* 協力して調理する参加者（H26）

②平成26年度『異文化交流～インド料理を楽しもう！～』

今年度はローティというインドの家庭料理を調理することとした。前回参加者から、「カレーの試食もしたかった」との意見が多数あ

ったため、今年度は講師に2種類のカレーの提供をお願いした。なお、先にも述べたがあくまで事業の主となるのは調理ではなく外国の料理を通じた「交流」であることから、講座の名称も同様に変更した。講座参加者は、14人と前年度比9名減となったが、その分参加者同士や講師とのコミュニケーションが十分に図れた。

ローティは小麦粉のみで手軽に調理でき、焼け上がりの瞬間にあたかも風船のように膨らむ姿が参加者の歓声を誘った。講師の友人のインド人女性とその娘さんも参加し、調理の指導をお願いした。「インドの家庭ではこれが主食。毎日作っています。」との言葉どおり手馴れた手捌きで生地をこねていた。地区内の食生活改善推進員も数名参加しており、慣れない手つきの男性参加者に手ほどきするなど、参加者同士が笑顔で交流する様子も見受けられた。



*ふくら焼けたローティ *笑顔で調理

(2) 事業における工夫点

- 講師が撮影したインドの街並みや観光名所等の写真・ビデオをプロジェクターで上映しながらインドの生活について講話いただいた。(H25)
- 講師よりインドの紙幣(ルピー)やタンカ(伝統画)を借用し講座にて披露。見て、触って異文化を味わった。(H25・H26)
- 簡単なヒンドゥー語、ネパール語を学習し互いに挨拶程度の会話ができるようにした。
- インタビュー形式で講師に話を伺った。「来日してから大変だったこと」「インドとの違いに戸惑ったこと」などをお話いただき、外国人の人権について考える時間を持った。(H26)
- 参加者に「講座の感想」を発表していただいた。(H26)



*インタビュー形式による講師のお話
*焼きたてローティを2種類のカレーとともに

(3) 参加者の感想

- ・地域の外国人のことを理解できた。彼らの目線で物事を捉えることをしていきたい。
- ・講師の先生の親切で丁寧な指導に感謝。
- ・ローティはすごく作りやすく、体験しやすい調理だった。また、テンジンさんへのインタビューは質問内容がとても細かく、知りたいことは全て聞いていただけた。(事業アンケートより抜粋)

4 おわりに

継続した事業により、異文化交流の機会を地域に提供することができた。文化の違いに、壁や抵抗はあれど、ひとたび関わりを持つてしまえば理解が生まれ互いの世界観も広がることの実証できたのではないだろうか。このことを裏付けるかのように、講師と参加者もすぐに打ち解け嬉しそうに交流を深めていた。



*タンカの説明をする講師 *感想を発表する参加男性

内牧地区にも多くの外国人が暮らしている。同じ地域に住む外国人が、何か困っていたり不自由な思いをしているのを見掛けたら、手助けができるような関係が構築されることが望ましい。昨年および今回の事業は、ほんの些細な一歩にすぎない。しかし事業参加者が、外国人に対し、偏見なく優しい気持ちをもって接するようになれば幸いである。

地域ととけあう公民館の役割として、今後も地域課題を積極的に取り上げ事業に結び付けていくとともに、外国人を参加対象とした句会及び茶会など、外国人が日本文化を体験する事業の実施を検討したい。

また、片桐氏の人脈を頼り、様々な外国人の講師を招き、ゆくゆくは諸国の文化に触れ異文化理解の促進を図る機会を市内全域に広げていきたいと考える。



*参加者で記念撮影